

特別講演 2

「認知症の BPSD に対する漢方治療」

筑波大学大学院人間総合科学研究科 精神病態医学准教授

水上 勝義 先生

認知症高齢者にみられる精神・行動症状（BPSD）は、日常生活動作（ADL）の低下や介護者の心理的ストレスの一因となり、在宅療養が困難となる要因となる。従来 BPSD に対しては抗精神病薬が頻用されてきたが、その副作用がしばしば問題となり、より安全な治療法の開発が重要な課題であった。

抗精神病薬に代わる治療薬の一つに漢方薬があげられる。これまで、いくつかの漢方薬が BPSD に対して用いられてきた。最近では、抑肝散の効果が注目されている。抑肝散はこれまで認知症高齢者の易怒性、興奮、攻撃的言動などの症状に対して有効なことが報告されてきた。また身体機能への影響が少なく、抗コリン作用も認められないため、比較的安全と考えられる。今回は最近関東地区 20 の医療施設が行った共同研究の結果についても紹介する。

在宅患者の BPSD の治療に対して漢方治療は重要な選択肢の一つと考えられる。